



組合員活動の
コーナー

お弁当は 工夫しだいで簡単に楽しく!

9月12日 大東北部・野崎パル委員会
18名参加(子ども5名含む)



運動会・行楽シーズンを前に、簡単においしいお弁当を生協商品で作りました。この日の目玉は、イサミの国産

組合員活動は「食」「平和」「環境」「くらし」の4つの柱にそって各地域で多彩なとりくみが行われています。その様子を紹介していきます。

牛を使った、肉巻きおにぎり。 「パルコープ」の商品は放射能検査も行なっているの、安心して利用できます。 「おにぎり」学習しながら、お肉を巻いたおにぎりを、みんなでホットプレートで焼きました。その他、温めるだけの「家のからあげ」や冷凍「北海道のそのまま枝豆」などを彩り良く各自持参したお弁当箱に、思いおもいに詰めていました。

肉巻きおにぎり 作り方

白おにぎりに、解凍したすき焼き用肉を巻いて、再度にぎって馴染ませる。そのまま焼いて(焦げ目が付くくらいシッカリ)、すき焼きのたれを入れ絡ませながら少し焼く。盛り付けに擦りゴマをひとつまみ。



「おにぎり作りが苦手なので参加募集の“委員会ニュース”を見つけた時、「これだ!」と思いました。おばあちゃんのおにぎりなら食べる子どもたちにも、これなら自慢できるかな」と向井フィオナさん(左)。友人の生駒さん(右)は9カ月の双子を連れて参加。委員さんに「抱っこしとくよ」と見てもらいながら、和気あいあいとお弁当づくりを楽しんでいました。

「レシピを見ただけではなかなか作らないものも教えてもらってよかったし、楽しかったです」試食タイムにはそれぞれの子どもさんと一緒に。菊池さん(左)と川端さん(右)

国産牛
すき焼用肩ロース 冷凍
11月2回 250g 780円

～ 岩手 被災地ボランティア活動 ～



写真は金崎さん

壊れた家屋の木材を使い、避難所ではそれで風呂を沸かし、今では、その木材を割って薪として販売している。他のボランティア活動と違って、被災者の方と一緒に作業をするので、一緒に前を向いての達成感がありました。

(共同購入 商品部・高橋さん)



【第2期第4陣】9月10日～16日 支所職員など14名(内よどがわ生協の方2名・ならコープの方3名)

金橋(港支所の営業担当)、中嶋(鶴見支所)、原田(都島支所で北区の配送担当)、奥岡(南寝屋川支所で守口市の配送担当)、松井(商品部)、吉田(システム経理部)、藤山(よどがわ生協)、辻本(よどがわ生協)、今西(ならコープ)、中川(ならコープ)、衛藤(ならコープ)、内藤、新居、高橋

(9月12日、平野支所・内藤さん)

「まけないぞう」の活動の重要性と広がり、いろいろな事を聞きながら現地へ向かいました。たくさんの方が集まってこられ、自立の第一歩の収入にもなる、真剣に取り組まれている方もおられました。仮設住宅では、孤独にならないよう集会所が作られていますが、手軽に身近に使用できないのが現状です。ボランティアが、集まれる企画をすることで、カギを開け、集まるきっかけを作ることとても重要だと知りました。



【第2期第5陣】9月17日～23日 支所職員など14名(内ならコープの方2名)

田中(北枚方支所で枚方市の配送担当)、吉田(コールセンター)、佐竹(ベジタブルセンター)、古賀(パル企画)、池澤(共同購入本部共済)、菊田(平野支所で東住吉区の配送担当)、山本(運営部)、池田(鶴見支所)、植田(都島支所)、中井(ならコープ)、畠田(ならコープ)、堀、川島、江口

(9月19日、生野個性センターの営業担当・江口さん)

「東北も必ず復興すると確信して頂きたい」と。途中から大粒の涙を流され「脳梗塞で倒れたダンナと東北に移り住み震災にあい、やりきれない思いで...」何度も「復興できるかな?」と尋ねておられました。「私どもにできる事があれば何でも言ってください、互いにかんばりましょう」帰りに、見えなくなるまで見送りたいとき後ろ髪をひかれる思いです。仮設住宅の生活はまだまだ不便さを感じておられます。生協にできることと期待はまだまだあると思います。

東北も必ず復興すると 確信していただきたくて

5月からのボランティア活動は9月末までで合計18陣になりました。活動している職員の毎日の感想レポートを抜粋でご紹介します。



こたつ布団をお届けしたとき、「何処から来られました?」「兵庫からです。実は私も阪神の地震の際に被災しました。あときの全国からの物資や励ましが心強く、やっとなんか復興できました。ご恩返し、東北も必ず復興すると確信して頂きたいと...」



NO.4

被災者に寄り添い、絆をつなげる支援活動を

沿岸部の被災地を「後方」支援している「遠野まごころネット」に集まるボランティアは、10月に入り1日100名前後と少なくなってきました。

現在の活動は、瓦礫撤去が遅れた地区での作業と同時に、瓦礫撤去後の土地を元の畑や田んぼに復「耕」しようと小石や木くず拾いなどの地道な作業に遷っています。復「耕」された畑は、地元の方の好意で仮設住宅の方々に使ってもらえたらとコミュニティーの場になっています。

一方、仮設住宅の集会所へは「お茶っこ」や「まけないぞう」づくりなど、コミュニティーの場づくりに連日足を運んでいます。最近は「おとうちゃん」おじいちゃんを引っ張りだそうと「ベンチづくり」を始めた仮設住宅もあります。

このようなソフトの支援活動は、「部屋に閉じこもり」がちな冬場にこそ必要となっています。パルコープからのボランティア職員は、物資のお届けと合わせ、大阪の組合員に鍛えられた「しゃべり」を活かしたソフト活動に参加しています。

(NPO遠野まごころネットに常駐する事務局・林さんより)



まけないぞう

被災者の方と、タオルで「震災に負けない家」を作ります。400円で販売し、内100円が作り手の方の収入になります。

